find＋that 節構文の認知的分析

友　澤　宏　隆

〈Abstract〉

The semantic difference between the *find*+*that*-clause construction and its single-clause counterpart, the *find*＋O＋C construction, is often characterized in terms of the notion of proximity/distance. This paper attempts to show a limitation of the iconicity-based approach and offer an alternative analysis of the semantics of the former structure that involves an objectification of the propositional content of the subordinate clause, as well as a metaphorical extension of the object of the action denoted by the main verb. The analysis additionally suggests that the *find*+*that*-clause construction exhibits varying degrees of indirectness depending on the nature of the finding described.

1. 序説

ある文において，述語動詞が補文構造をとる場合，その文の意味は類像性（iconicity）の原則の一つである近接性／距離の原則（principle of proximity/distance）の点から説明されることがある(1)。たとえば，次の例を参照（Dirven and Verspoor 2004: 10）：

（1）　I made *her* leave.

（2）　I wanted *her* to leave.

（3）　I hoped *that she would* leave.

これらにおいて，主文の主語の意志・願意が補文の表す行為の主体に及ぼす影響が（1）においては直接的であり，この場合主文の動詞（“made”）と補文内の動詞（“leave”）との距離が最小であるのに対して，（2）はそのような影響が間接的で主文動詞と補文内動詞との距離が（1）の場合より大きく，（3）はそのような影響が存在せず両動詞間の距離が最大であると見なされる(2)。

上で例示した近接性／距離の原則は種々の構文間の意味的相違を統一的な観点か

ら説明することを可能にするものであるが，本稿では動詞 find が補文構造 O（NP）＋C および that 節をとる場合について，このような類像性の原則に基づく分析を検討した後，その問題点を指摘し，find＋that 節の構文の意味を認知的により妥当な形で特徴づけることをめざす。find の目的語として用いられた that 節の適正な位置づけに基づいて構文の意味を規定し，その上で従来の分析において焦点化された点についても再検討を試みたいと思う。

2. find の補文構造――find＋O＋C と find＋that 節

2.1　類像性の原則に基づく分析

動詞 find は補文構造として，次のように O（NP）＋C，O（NP）＋to be＋C および that 節をとることができる：

（4a）　I **find** the chair comfortable.

（4b）　I **find** the chair to be comfortable.

（4c）　I **find** that the chair is comfortable.（4a–c, 池上 2006 : 73）

（4a）は二つの NP（“I” と “the　chair”）が同じの節の中の主語と目的語であり，両者の距離が近いが，（4c）はこれらの NP はそれぞれ主節と従属節に位置づけられており，文の構造上両者は離れている。このような表現要素の近接性とそれらを含む文が表す意味との間の類像的な関係に基づいて，池上（2006 : 73）は次のように述べている：

（5）　……（（4a–c）は）どの文も椅子の座り心地のよさについて述べているわけであるが，……（（4a）は）もっとも直接的な体験に基づいて座り心地がよいと言っているという印象を与える表現――たとえば，今まさに椅子に座ってその座り心地を試しているという状況で発した表現――という感じがする。それに対して，（（4c）は）判断の根拠がもっとも間接的であるような場合，たとえば座り心地のよさを測定する何らかのテストを椅子に施してみて，その結果の数値を見ながら座り心地のよいものと判定しているといったような感じである。（（4b））のような言い方は……中間的な位置を占める。

（4a–c）のうち，ここでは（4a）および（4c）に着目することにすると，それぞれの文の構造は次のように表すことができる：

（4a）　S（NP_1）＋find＋O（NP_2）＋C

（4c）　S_1（NP_1）＋find＋that 節（S_2（NP_2）＋is＋C）

これに従って（5）の内容をまとめると，次のようになるであろう：

（6）　（4a）は S（NP_1）と O（NP_2）が同一節内という構造上近接した位置にあり，S（NP_1）による O（NP_2）の経験という直接的な根拠に基づいて O（NP_2）が C であると判定しているのに対して，（4c）は S_1（NP_1）と S_2（NP_2）が異なる節にあって構造上離れており，S_1（NP_1）は S_2（NP_2）と直接関わることなく何らかの間接的な根拠に基づいて S_2（NP_2）が C であると判定している(3)

（4a）（4c）の場合，判定／判断の根拠がそれぞれ直接的・間接的であることから，各々直接的・間接的な判定／判断を表すと言うことができるであろう。NP_1 と NP_2 の文構造上の距離がそれを含む文が表す事象の直接性・間接性と相関するということである。

2.2　類像性の原則に基づく分析の問題点

上では S（NP_1）＋find＋O（NP_2）＋C および S_1（NP_1）＋find＋that 節（S_2（NP_2）＋is＋C）が表す意味の違いを類像性の原則の一つである近接性／距離の原則に基づいて捉える分析を概観したが，ここで問うべき事柄として，後者の型はつねに間接的な判定／判断を表し，前者のように直接的な判定／判断を表すことはできないのかどうかという点がある。これに関して，Langacker（1991）および Verspoor（1999）は Borkin（1973）の説を紹介する形で次のように述べている：

（7）　As Borkin described it,（the sentence *Susan* ***found*** *that the bed was uncomfortable*）might be used if Susan had searched through her files to learn the results of consumer reaction tests, …（Langacker 1991: 450）

（8）　According to Borkin,（the sentence *Susan* ***found*** *that the bed was uncomfortable*）might be used if Susan's finding was based on some indirect evidence, such as consumer reaction test results, …（Verspoor 1999: 506; cf. 野村 2014 : 102, 103）

（7）（8）によると，Susan **found** that the bed was uncomfortable という文は NP_1（“Susan”）が（ファイルを検索したときに出てきた消費者アンケートの結果を見るなどの）間接的な根拠に基づいて that 節で表される内容（“the bed was uncomfortable”）を判断／発見した場合に用いられる可能性がある／用いられるのがふさわしいということである。これは（5）の分析と同様のものと考えられるが，ここ

で注意すべきことは，S_1（NP_1）＋find＋that 節（S_2（NP_2）＋is＋C）が用いられるのはそのような間接的な判断／発見を表す場合に限られるとは述べられていないという点である。さらに，Lakoff and Johnson（1980）の説を見ておくことにする：

（9）　The following pair are even subtler:

I **found** that the chair was comfortable.

I **found** the chair comfortable.

The second sentence indicates that I found out that the chair was comfortable *by direct experience*—by sitting in it. The first sentence leaves open the possibility that I found it out *indirectly*—say, by asking people or taking a survey.（Lakoff and Johnson 1980: 130）

（9）によると，第二文は NP_1（＝話者）の NP_2（“the chair”）に対する直接的な経験による発見／判断を表すが，第一文は話者が人に尋ねたり調査をしたりするなどの手段によって間接的な発見／判断をしたという「余地を残す（“leaves open the possibility”）」ということであり，これはすなわち，第一文は直接的な経験による発見／判断をしたという解釈も排除されないことを意味するものと理解することができる。

（7）—（9）の記述から，S_1（NP_1）＋find＋that 節（S_2（NP_2）＋is＋C）は間接的のみならず直接的な発見／判断を表す場合にも用いられうることが示唆されるが，それに該当すると見なされる用例を見出すのは困難ではない。次の一節を見てみよう：

（10）　Most people imagine Chinese must be a very difficult language to learn. However, after shedding some of the possible preconceptions about language that you may have, you may well **find** that spoken Chinese is not as difficult as you had thought—you may even **find** it comparatively easy!（Scurfield 1991: Introduction）

（10）は中国語の自習書の序論の部分であるが，第一例の find が that 節をとっている。これは NP_1（“you”）が，NP_2（“spoken Chinese”）の指し示すものにこれからふれた後に発見する可能性が高いと思われる事柄を表しており，その発見は間接的なものではなく自分の直接的な経験に基づくものである。さらに，次の例を参照：

（11）　“When I first went to the Arab World back in the 1970s, I noticed how hospitable people are. Before going there people told me you have to be careful, so there was already a stereotype that had been created in my

mind, when in fact I **found** that people there are very much like the people that I came from in Kentucky," he says.（*VOA News*, October 30, 2009）

（11）は米国ケンタッキー州出身の話者が 1970 年代に初めてアラブ世界を訪問したときのことについて語ったものである。NP_1（"I"）が NP_2（"people there"）に直接ふれた結果，自分が持っていたステレオタイプとは異なった，that 節によって表される事柄を発見したことを述べており，その発見は（10）の場合と同様自分の実体験に基づくものである。次の（12)―(14）も同様に考えられる：

（12） I think that you'll **find** she's very accessible.（*LDCE*[3], "accessible"）(4)

（13） I had a wonderful experience. I **found** that she was very caring and compassionate. Knowledgeable about mood disorders. She helped me and my daughter through a difficult time. I would highly recommend her.（she＝話者がかかっていた心理セラピスト）
https://m.yellowpages.com/fall-river-ma/mip/tapestry-psychotherapy-509802329

（14） We both kept silence for some minutes. When I raised my eyes, I **found** that she was steadily observant of me. Perhaps she had followed the current of my mind; for it seemed to me an easy one to track now, wilful as it had been once.（Charles Dickens, *David Copperfield*）

これらの例が示すように，S_1（NP_1）＋find＋that 節（S_2（NP_2）＋is＋C）の型は実際には間接的な発見／判断に限定されず，直接的な発見／判断を表す場合も存在することがわかる(5)。このことは，S_1（NP_1）＋find＋that 節（S_2（NP_2）＋is＋C）の意味を上で見てきたような類像性の原則に基づく S（NP_1）＋find＋O（NP_2）＋C との対照において特徴づけるのではなく，別の角度から考察することが必要であることを示していると言える。

3. find＋that 節構文の意味

2. では S（NP_1）＋find＋O（NP_2）＋C と S_1（NP_1）＋find＋that 節（S_2（NP_2）＋is＋C）の意味的相違を一種の類像性の観点から捉える分析を検討し，その限界を指摘した。上では両者の型の対照に考察の基盤を置いてきたが，以下では後者の型に焦点を当て，それが表す意味を認知的により妥当な形で特徴づけることを試みる。

find の目的語として用いられた that 節の位置づけのあり方から議論を始めることにする。

3.1　find が表す行為の対象と行為の捉え方

Langacker は補文標識 that の役割はその節が表す命題内容の「客体化／客体的把握（objectification／objective construal）」であると述べている（Langacker 1991: 447; Langacker 2008: 444）。これは換言すれば，that はその命題内容を「コト化（事実化）」するものであり，that 節は全体で（現実世界または仮想世界における）一つの「コト（事実）」を表しているということである。そうすると S_1（NP_1）＋find＋that 節（S_2（NP_2）＋is＋C）は，客体／客観的な存在として捉えられる that 節の事柄 ── 「コト（事実）」 ── に S_1（NP_1）が接近し，（結果として）その事柄を発見した／に遭遇したことを表すと理解することができる(6)。発見／遭遇の対象の客体化が重要な点であり，その発見／遭遇の手段や形態が直接的であるか間接的であるかはそれとは別の次元の問題である。

S_1（NP_1）＋find＋that 節の意味は補文標識の果たす認知的な機能に基づいてこのように捉えることができるが，ここで動詞 find に特徴的な点について少し考察しておきたいと思う。find は補部として，that 節以外に通常の NP をとって用いられる場合もある。次の例を参照：

（15）　I **found** that the chair was comfortable.（cf. (9)）

（16）　If I **found** a wallet in the street, I'd take it to the police station.（Murphy 2004: 76）

(16) の found の補部は通常の NP（“a wallet”）であるのに対して，(15) は that 節（“that the chair was comfortable”）であるが，両者はいずれも found の目的語であり，形の上では（15）と（16）の動詞 find の用法は平行していると言える。通常の NP は「モノ（個物）」を表し，that 節は「コト（事実）」を表すので，(16) と (15) において find はそれぞれ「モノの発見／遭遇」および「コトの発見／遭遇」を表すのに用いられていることになるが，これは find が表す行為の対象が本来基本的と考えられる「モノ」から「コト」へと拡張したものと捉えることができる(7)。すなわち，この find の二つの用法は，次のメタファーに動機づけられていると考えることができる：

（17）　コト（事実）はモノ（個物）である

この場合，「モノ（個物）」は「非分割の全体」として捉えられ，「コト（事実）」も

そのようなものとして捉えられる。(16)(15) に関して言うと，(16) は “a wallet (1 個の財布)” を「丸ごと一つの個物」として発見したということであり，(15) は “that the chair was comfortable（その椅子は座り心地がよかったということ)” を「丸ごと一つの事実」として発見したということである。

以下に S_1（NP_1）＋find＋that 節の例をいくつか補っておく：

(18) I **found** I had forgotten my phone.（*Chambers*）

(19) I **found**（that）I could easily swim a mile.（*CALD*[3]）

(20) We came home to **find**（that）the cat had had kittens.（*CALD*[3]）

(21) The two biologists **found**, to their surprise, that both groups of birds survived equally well.（*Collins COBUILD*[7]）

(22) A study **found** that all living Aboriginal Australians descend from a single founding population that arrived about 50,000 years ago.（*The New York Times*, MARCH 8, 2017）

(23) Some time ago I noticed that the English conversation school where I was working, hadn't paid me for three months. Payment was made through the bank by 'jido shiharai' or automatic payment system. “But we HAVE paid you,” the school accountant told me. When she looked into the matter she **found** she had made a strange mistake. There was another teacher there whose name was Paul Bryan. She had confused his name of Paul Bryan with my name which is Brian Powle. She had paid MY money into HIS bank account!（Brian W. Powle, “News of Human Interest 10”）[(8)]

この (18)—(23) からわかるように，S_1（NP_1）＋find に続く that 節の述部の主動詞は be であるとは限らず，それ以外のものも可能である。従来の分析例における構文条件の限定は，つねに S（NP_1）＋find＋O（NP_2）＋C との対照が意識されていたことに起因するものである。

3.2　find が表す行為の間接性

前節で検討したように，類像性の原則に基づく分析では，S（NP_1）＋find＋O（NP_2）＋C と S_1（NP_1）＋find＋that 節（S_2（NP_2）＋is＋C）において S_1（NP_1）と S_2（NP_2）の関わり合いのあり方に依存する各々の行為のあり方 —— その行為が直接的か間接的か —— が議論の中心であった。ここで問題にしたいのは，そのような線

での分析において，その行為が「間接的」と判断されうる S_1（NP_1）＋find＋that 節（S_2（NP_2）＋VP）はどのようなカテゴリーを成しうるかという点である。たとえば上の（22）や（23）の場合だと，NP_1（“A study” “she”）は NP_2（“all living Aboriginal Australians” “she”）と直接的に関わり合うとは考え難いため，その行為は間接的な発見／遭遇であることになるが，そのような発見／遭遇に至る過程において，NP_1 は実際には（that 節では言及されていない）種々のモノと能動的・直接的に関わり合っていたことが推測される。これに対して次の場合はどうであろうか：

（24）　I **found** that the chair was comfortable.（＝(15)）

（25）　When I arrived at the airport, I **found**（that）the plane for Paris had already left.（マケーレブ／岩垣 1984: 156）

（26）　More used to photographing people like model and actress Lily Cole, Ms Farmer said: “I was spending a lot of time in glamorous places, but there was always poverty around, and I **found** that 5,000 children were dying each day from dirty water.”（*BBC News*, 8 March 2013）

(24)―(26）の場合，find がとっている that 節は S_1（NP_1）が外部から取得した言語的な情報を表していると解することが可能である(9)。そうだとすると，S_1（NP_1）はそのような情報の取得により間接的に that 節が表す事柄を発見した／に遭遇したと言ってよいが，この場合（22)(23）のように S_1（NP_1）は（that 節で言及されているものを含め）ある程度の時間をかけて何らかのモノと能動的・直接的に関わり合うプロセスの結果としてそのような発見／遭遇をしたのではないとしたら，その行為の「間接性」の度合いは（22)(23）の場合よりも高いことになる。すなわち，その行為が「間接的」と判断されうる S_1（NP_1）＋find＋that 節のカテゴリーは，行為の間接性の程度に差があるメンバーから成っていると言える。(22)―(26）に関しては次のようになる：

（27）　行為の間接度の可能性：(24)(25)(26)＞(22)(23)

find がとる that 節が言語的情報を表していると解される場合，節の内容は他者／外部からもたらされるものであるため，そのような that 節は上述した「事柄の客体的把握」という特徴と結びつきやすいと考えられる。この場合，find が表す行為の間接度が高く，それらの例は「間接的」と見なされる S_1（NP_1）＋find＋that 節のカテゴリーの典型的なメンバーを構成していると考えることができる。同じラベルによってまとめられる構文のカテゴリーであっても，その内部は一枚岩ではないことを示していると言えるであろう。

4. 結語

本稿では，動詞 find が補文構造 O（NP）＋C および that 節をとる場合について，類像性の原則の一つである近接性／距離の原則に基づく分析を検討しその限界を指摘した後，find＋that 節の型に焦点を当て，それが表す意味を認知的により妥当な形で特徴づけることを試みた。S_1（NP_1）＋find＋that 節（S_2（NP_2）＋VP）において，find が表す行為の対象である that 節は客体的に捉えられるコト（事実）を表し，そのようなコト ── モノ（個物）からの拡張として，非分割の全体として捉えられるコト ── を S_1（NP_1）が発見／遭遇の対象とするのがこの構文であると規定した。さらに，従来の分析では S_1（NP_1）と S_2（NP_2）との関わり合いのあり方と相関する行為のあり方が焦点化されていたが，その行為が「間接的」と判断されうる S_1（NP_1）＋find＋that 節（S_2（NP_2）＋VP）は，that 節が外部から取得された言語的情報を表し find がとる that 節の本質的特徴と親和的である場合を典型とするカテゴリーを形成していることを示唆した。

注

1. 近接性／距離の原則およびそれと述語動詞が補文構造をとる文の意味との関連については，Dirven and Verspoor（2004: 10），Radden and Dirven（2007: 53）および Taylor（2002: 46, 47, 432, 433）を参照。
2. （1）は補文が表す行為の主体がその行為を行なったこと（＝*She left*）を表し，補文が表す事象の実現が含意されるが，(2)(3) にはその含意はない。これは S＋V＋O＋Inf.（原形）の形式の一般的特徴である。Duffley（1992）を参照。
3. この S（NP_1）＋find＋O（NP_2）＋C と S_1（NP_1）＋find＋that 節（S_2（NP_2）＋is＋C）の意味的な違いについては，このような判定の根拠の直接性・間接性のほか，判定される事象の主観性・客観性という点から捉えられることもある。今井（2010: 199）および畠山（2011: 81）を参照。
4. この例では find の後に補文標識 that が省略されている。注 8 を参照。
5. 小西（1980: 564, 565），マケーレブ／岩垣（1984: 157）およびジーニアス[5] “find” も参照。
6. このことから，注 3 で言及した今井（2010: 199）と畠山（2011: 81）の指摘には妥当性があると考えられる。
7. ここでの「モノ（個物）」は「無生物」だけでなく「有生物（人や動物など）」も含むものとする。したがって，たとえば *I found him in the street* における him も「モノ」に含まれる。また，それが表す行為の対象として find と同様「モノ（個物）」と「コト（事実）」の両方が可能な動詞として他に discover があるが，discover はあるモノやコトを初

めて（驚きを持って）発見する場合に用いられるのが普通である（Dixon 2005: 133）。

8. （18）―（20）および（23）の例では found の後に補文標識 that が省略されているかまたは省略可能である。that の省略の可能性については Langacker（2008: 444）を参照。

9. このような例において，that 節が外部から（受動的に）取得された言語的情報を表す場合は，次のように find の代わりに learn を用いて表すことができる：

When I arrived at the airport, I **learned** (that) the plane for Paris had already left.

通常 learn＋that 節はこのように外部からの言語的情報の取得を表し，find と異なり行為主体の直接的な経験による発見は表さない。

例文出典

Scurfield, Elizabeth (1991) *Teach Yourself Chinese: A Complete Course for Beginners*. Sevenoaks, Kent: Hodder and Stoughton.

Chambers = *Chambers Student Learners' Dictionary*.

CALD[3] = *Cambridge Advanced Learner's Dictionary*, 3rd edition.

Collins COBUILD[7] = *Collins COBUILD Advanced Dictionary of English*, 7th edition.

LDCE[3] = *Longman Dictionary of Contemporary English*, 3rd edition.

参考文献

畠山雄二（2011）『理系の人はなぜ英語の上達が早いのか』東京：草思社。

池上嘉彦（2006）『英語の感覚・日本語の感覚〈ことばの意味〉のしくみ』東京：日本放送出版協会。

今井隆夫（2010）『イメージで捉える感覚英文法――認知文法を参照した英語学習法――』東京：開拓社。

小西友七（編）（1980）『英語基本動詞辞典』東京：研究社出版。

ジャン・マケーレブ／岩垣守彦（1984）『アメリカ人語』東京：読売新聞社。

南出康世（編）（2014）『ジーニアス英和辞典　第５版』東京：大修館書店。（ジーニアス[5]）

野村益寛（2014）『ファンダメンタル認知言語学』東京：ひつじ書房。

Borkin, Ann (1973) "*To be* and not *to be*." *CLS* 9: 44–56.

Dirven, René and Marjolijn Verspoor (2004) *Cognitive Explorations of Language and Linguistics*. Second Revised Edition. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Dixon, R. M. W. (2005) *A Semantic Approach to English Grammar*. Second Edition.

Duffley, Patrick J. (1992) *The English Infinitive*. New York: Longman

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.

Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 2: *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar*: A Basic Introduction. New York: Oxford University Press.

Murphy, Raymond (2004) *English Grammar in Use*. Third Edition. Cambridge: Cambridge University Press.

Radden, Günter and René Dirven (2007) *Cognitive English Grammar*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Taylor, John R. (2002) *Cognitive Grammar*. New York: Oxford University Press.

Verspoor, Marjolijn (1999) "*To* infinitives." In Leon G. De Stadler and Christoph Eyrich (eds.), *Issues in Cognitive Linguistics: 1993 Proceedings of the International Cognitive Linguistics Conference*, 505–526. Berlin; New York: Walter de Gruyter.